

# 人形芝居脚本

## 爆弾三勇士

### 菊池ふじの

三勇士を脚本に致します動機や、いきさつ、等につきましては、前の「人形に依るおはなしの演出」と云ふ題の中で、ちよいくし申し述べましたから、御めんどうでも合せて御覽いたゞき度いと存じます。茲には、人形の作り方、人形の服装等について、前に缺けて居ります所を、少々申上げて見度いと思ひます。

人形は、桐の木を、極く大體の人の顔の形に彫つて造りました。先づ厚さ一寸三分、横二寸三分、縦三寸五分（以上鯨尺）位の桐の木片を拵へます。そして縦の一端の頸になる部（中に、指を入れる穴を廻る故、あまり細からぬ様）を、長さ六七分、幅一寸二分位にして残し、その他を切り落します。そして、四隅の角を削り落して、鼻を別に付けました。鼻をも浮き出

す様にすれば良いと思ひましたが、そうするには、かなりの厚さの木が要りますし、削るにも、かなり六ヶ敷いと思ひましたので、鼻は、角の所を長く角にそぎまして、別に膠で付けたのでございます。こう致しますと、割にやさしく、私共の様な不器用な者にも樂に作れました。頸の中の指を入れる穴は、初めは小刀で彫つて居りましたか、後ではかういふ穴をあける機械（ごく簡單な螺旋状のもの）のある事を知りそれを借りてあけました。こうして出来たものへ胡粉を塗り、目、口等を書き入れ、その上から茶色をぬつて人らしい色に致しました。帽子は、手近にあつたおまゝごと道具のお鍋が、鐵兜らしい恰好をして居りますので、それを借用いたし、黄褐色に塗りました。

服装は、前にも申述べました様に、之れだけは例外に、細かい點まで注意して、實物を手本にして拵へました。

布地等は區別しないでもいゝかと思ひましたが、人に頼みました所、セル地を寄越しましたので、之を將校の服とし、別に木綿の布地を下士の服に致しました。襟章は工兵と云ふので、海老茶色、肩章は其々の位置によつて變へました。劍等も將校と下士によつて違へました。將校は長い劍、下士は短い劍と云ふ様に。

それから、今までは足をつけずに居りましたが、之は軍人で、力をも現し度いと思ひましたので、足をつける事に致しました。足は、左右兩ズボンのつながつて居るものを身頃と別に作り、之に綿を入れてふくらませ、下の方に、ゲートルを巻き、靴を穿かせました。こうして作りました足を、前身頃にしっかりと縫ひつけ、後身頃の所を明けて置いて、こゝから遣ふ手を出入させる様にいたしました。

それからこの脚本の中の用語は、なるべく分り易い様にと心掛けましたが、勢の上から、遂思ふ様にまでやさしく出来ませんでした。小さい組の子供には、少し分り憎いか

と思ひます。幼稚園年長組や小學校低學年の、殊に男の兒によろこばれる様でございます。

## 第一場 麥家宅原野

上海郊外の廣野。

背景——薄暮から、翌早朝にかけての處なれば、あまり明るからざるやう。

又舞臺の一隅に、バラックの陣地事務所があり電話等設けてあると尙いゝと思ふ。

登場人形その他

松下大尉

大島少尉

東島少尉

馬田軍曹

決死隊、——三十六名、之を八人位づゝ四五組に分けて、

板に軍人の繪を描いて鋸シンで切抜き、それらしく採色する。この軍人を

八人位づゝ、一枚の板に立てて置く。

開幕前に舞臺裏にて東京日々新聞の「爆彈三勇士の歌」のレコードをかけ、観客に気分を起こす。

——レコード終ると同時に幕あく——

松下大尉獨白

松下大尉「さつきの電話に依ると、下元旅團は、明日の朝五時三十分、いよいよあの廟行鎮の總攻撃をする事に決つたそうじや。それで、吾が松下中隊は、總攻撃の前にあの堅固な鐵條網を爆破して突撃の路を開け、と云ふ命令を受けた。軍人としてはこの上も無い名譽の事だ。勿論吾等は、大日本帝國軍人である。敵が何萬人居やうとどんな鐵條網が張つてあらうと、何でも無い。直ぐ爆破して敵をやつつけてしまふのはた易い事である。兵士達も皆強い。腕をさすつてこの命令の降るのを前から待つてゐた。この命令を兵士達に傳へたら、嘸、喜んで、みんな志願するであらうな。(重い調)併し、あの鐵條網の爆破は、なか／＼容易な事ではないぞ。(頭を垂れ、しげしげ黙考)敵は極く目の前に居るし、あの通り始終、小銃や機關銃を打つてゐる。こつちでもうまくやらなくてはならん。吾等の命は、戦争の無い時から、いつでも 天皇陛下に捧

げてゐる命である。この上は肉彈戰では是非ともあしたの夜明けまでに、あの鐵條網を破らねばならない。(顔を上げて)

もう六時近いな。用意もある事であるから、小隊長を呼んで決死隊を募らう、(左手をふりかへり)馬田軍曹、馬田軍曹」

馬田軍曹「ハイ」

と現れ、擧手の禮、次いで

「馬田軍曹であります」

松下大尉「馬田軍曹、大島小隊長と、東島小隊長を此處へ呼んでくれ」

馬田軍曹「ハイ、大島小隊長と東島小隊長を呼んでまゐります」

と、舞臺より消える。この間松下大尉、空を見たり、そこら歩きたりする、間もなく兩少尉來る。兩少尉とも擧手の禮。

大島少尉「松下中隊長殿、大島小隊長であります」

東島少尉「松下中隊長殿、東島小隊長であります」

松下大尉「おゝ待つてゐました。(キツト二少尉の顔をみつめて)大島小

隊長、東島小隊長、吾が中隊に、大事な命令が降りましてぞ」

大島少尉「中隊長殿、どういふ命令でありますか?」

松下大尉「それはな、あしたの朝五時三十分を期して、吾

が軍はいよ／＼廟行鎮の敵の陣地を總攻撃する事になつたのだ。下元旅團の森田大隊は右の方から、碓大隊は真中から、敵を總攻撃する事に決まつたのだ。(一段と聲を大きく)

それで、吾が松下工兵中隊は、その前に、右の方に三ヶ所、中央に五ヶ所の突撃路を開けよ、と云ふ名譽ある命令を受けたのだ。併しあの鐵條網は、君達も知つてゐる通りの堅固な要害なのだ。なみ大抵の手段では、とても撃破は出来まい。御苦勞であるが、大島中隊から二十一名、東島小隊から十五名、各々決死隊を募つて、此處へ連れて来て貰ひ度い、一言、訓示を與へたいと思ふから」

二少尉「ハイ」

と、各々の小隊へ消える、やがて合計三十六名の決死隊と共に舞臺に現れる。夫々舉手の禮。

東島少尉「兩小隊とも、澤山の決死隊志願者がありましたので、その中から、御命令の人數、三十六名だけ撰抜して來ました」

大島少尉「決死隊氣を付け!!」

決死隊は、各々の小隊長を先頭に、二列從隊に整列する。

松下大尉「一同に、一言訓示する。只今旅團命令が降つた本中隊は、正面の鐵條網を爆破して、突撃路を開けよと云ふ、重大なる命令を受けた。之は、本中隊のこの上もない光榮である。本中隊は誓つて此の名譽ある任務を全うして、目的を成し遂げなければならない。併し、この仕事は、なか／＼六ヶ敷い事で、今まで色々の事をして、この鐵條網を破らうとしたが、なか／＼うまく撃破出来ず、澤山の犠牲者を出して來たのである。併し我が中隊は、明朝までに、どんな事をして、も突撃路を作り、敵の陣を攻撃させなければならない。多勢の決死隊の中から撰ばれた君達は、勿論命は捨てざる覺悟ではあらうが、命にかけてこの仕事を仕遂げて貰はなければならない。一兵士「中隊長殿、吾々決死隊は、勿論死ぬ覺悟であります。どんな事をして、あの鐵條網を爆破いたします」松下大尉「お、よく言つてくれた。松下大尉、禮を言ふぞ、畏れ多い事ではあるが、天皇陛下に於かせられて

も、君達のこの忠義を聞き召されたら、嘸や御満足遊ばされる事であらう。では諸君、之が最後の別れた、東京の方を向いて、天皇陛下萬歳を三唱しよう。(大聲にて)  
天皇陛下萬歳!! 萬歳!! 萬歳!!

一同之に和す。

松下大尉「では之から部所について用意せよ、まだ時間もあるから手紙を出す所があつたら手紙を書け、言傳があるなら申し出よ。背囊の中もちやんと鞆するんだぞ、分つたか?」

一兵士「ハイ、分りました」

松下大尉「では、みんな部所につけ」

一同上手、下手兩方より散つて消える。松下獨白。

松下大尉「皆元氣で、どんな事をしても撃破すると云ふ。併し、この六ヶ敷い仕事に、生きて歸つて来る者があるかしら? あゝ大事な勇士をみすゝ殺してしまふとは惜しいことだ。みんな父母もあり兄弟もある身なのに!」

と默考する。

——幕——

## 第二場 三勇士控所

背景——廟行鎮の渺漠たる廣野。遙か彼方、舞臺左手より中央にかけて鐵條網見ゆ。

登場人形その他

北川上等兵

作江上等兵

江下上等兵

内田伍長

破壊筒——ボール紙製の筒の様なものへ、紙より等を巻いて竹の節を作り、之を青竹らしく採色する。

雲——お話の實際では朝霧なれど、霧は小道具として現はし憎い故、こゝは雲にした。かんれいしやへ描き、薄墨で採色、雲の形に切抜き、小道具として適當な時に舞臺面へ出す。

大爆音——紙の袋をふくらまして、それを破つて出す。

機關銃——おもちゃの機關銃の音。

ピストル——おもちゃのピストル。

——幕あく——

三勇士、野原に腰を下して話してゐる。

北川「僕達、折角この決死隊に志願して撰ばれたのはいいが、豫備班にされたのはつまらんな」

江下「そうだ、僕もそれが口惜しくて、しようがないんだ先きに出掛けた奴等が、爆破して突撃路を作つてしまつたら、もう俺達に用がなくなるんぢやないか」

作江「そうだ、用が無くなつちやつたらんな、僕はね、こんな度こそは偉い働きをして國の母を悦ばそうと思つてたのになあ。君！ほうらこないだも一寸、話したらう。

僕のお父さんと云ふのがね、日露戦争の時、輜重輸卒でね、輸卒と云ふのは、華々しい戦争はしないで、食糧を運んだり弾丸を運んだりするんだらう。それで戦死しないで國へ歸つたんだ、すると、國から出てた他の兵隊達は、やれ金鵄勳章だあ、何だつて、大變な名譽を貰つたのに、自分は恥しくて誰にも顔が合せられなかつたと云

つて話してたよ。だもんだから、せめてお前だけでも立派な軍人にして、父親の二倍も三倍もの働きをさせ度いと始終云つてたんだが、その父が僕が小學校を卒業しない中に死んでしまつたのよ。それでね、僕が兵隊にとられた時母は大層悦んで、今でも思ひ出すが、丸で大將にでもなつた様に、僕を佛壇の前に連れて行つて、この軍服姿をお父さんに見せ度いと、涙をこぼしたよ。

北川「そうか……、じや、今度の役目を、うまく仕遂げて死んだら、君のお母さんは……そうか」

作江「うん、俺にや、母の心がついてるんだ」

こゝへ内田伍長、紙を持つて来る。

内田「江下ゐるか」

江下「ハイ、江下をります」

内田「君に手紙が來てるぞ」

と、渡す、江下、ハイと答へながら受取る。内田三人に向ひ

内田「君達、決死隊に撰拔されてよかつたなあ、さつき中

隊長殿の御訓示もあつたが、君達しつかりやつてくれ、

頼むよ、ぢやまた會はうね」

と馳け去る。

北川「何だ、手紙だなんて、うまくやつてるな、國からか

〜?」

江下「うん、そうじゃない、どこかの子供からだ」

作江「そうか、ぢや慰問の手紙だな」

江下「うん、こないだ日本を立つ時、久留來のステーションで會つた、あの家谷と云ふ子供からの手紙だよ」

北川「うーん、では、天皇陛下の爲め、お國の爲めにどうぞ働いて来て下さいって、泣く様に云つて呉れたと云つて、君がすっかり昂奮して居たあの小學生からの手紙なのかね」

江下「あゝそうだよ、俺はあの小學生の云つて呉れた一言の爲に、もういつでも死ぬる氣になつて、愉快に日本を立つて來たんだ、こつちへ來てから、吳淞から手紙と血判を押したハンカチを送つてやつたが、こうして手紙を呉れる所を見ると、あの手紙やハンカチはまだ着かないのかなあ、君達マア聞いてくれよ、こんな事が書いてある。(手紙を擴げて讀む)「私の大事な大事な兵隊さん、立派なお

手柄をして、久留米へ歸つていらつしやる日を毎日々々指を折つて待つてゐます。あなたの凱旋の日には、どんな事をしたつて、家中、お父さんも、お母さんも、兄さんも、妹も、みんなでお迎へに行きます。私の大事な大事な兵隊さん、本當に、天子様の爲に働いて、死なないで歸つて来て下さい」だつて、こんな事が、書いてあるぜ。

作江「可愛い、事を書いてよこすなあ、日本の子供は、皆こうして待つてて呉れるんだもの、偉い働をしなくちや歸つても顔が合せられやしない」

こゝへ陰曆十七日の月、雲間より鮮やかに照らす。

江下一「おい、いゝ月ぢやないか、みんな見ろよ」

北川「ウン、でも鐵條網に近づくには、これじゃ敵に見つてられてしまふな」

作江「あゝ、でもあすこを見ろよ、雲が一ぱいあるから、出發する頃に、月も隠れるだらう、何!! 日本の神様が守つて下さるんだあ、きつと暗くならあ」

江下「ところで、時間も近づいて來るぜ、もうそろく用

意しようじやないか」

北川「あゝ、でもな、僕達は、どういふ風にして爆破したらいゝか、そいつを、相談しなくちやならないじやないか」

作江「そうだゝ、それが大事な相談だ、僕はさつきから考へてるんだがね、あの鐵條網は、とても堅固なんだから、それにあの直ぐそばに敵ががんばつてゝ、盛に機關銃を浴せかけてやがるんだ」

江下「そうだ、それでね、いつもの様に、爆彈を鐵條網のそばまで持つて行つて、口火に火をつけて置いて歸つて來るなんて暇は、どうしても無いと思ふんだ」

北川「そうだよ、それでね、さつきから俺は考へてるんだがな、三人の爆彈を一緒にしてさ、何か筒の中へでも入れて、何とかして敵彈に當らない様に、鐵條網の近くまで行き度いもんだな、そこで爆彈に火をつけて之れを持つたまゝで、三人一緒に體ごと鐵條網の中へ飛び込んでしまふんだ」

作江「そうだ、僕もさつきから同じ事を考へてたんだ」

江下「どうせ俺達の命は、とうの昔にみ國の爲めに捨ててるんだ、この場合、こうするより他に途は無いんだからなあ。そうやらう、やらうじやないか」

作江「うん、やらう、やらう」

北川「ところで、この事を中隊長殿にお話して行かなければならないだらうかなあ」

作江「さあ、でもな、あの情け深い中隊長の事だ、いくら決死隊だからつて、始めつから死んでかゝる様なこんな無茶な事は許されないかも知れないぞ」

江下「それもそうだな、いつそ黙つてやらうじやないか、こうしなけりやあの鐵條網は、どうしたつて爆破出來つこないんだぜ」

北川「うん、そうだゝ、もう仲間の誰にも、黙つて別れた方が、さつぱりしてゝ男らしいと云ふものだ」

作江、あたりを見廻し、青竹のあるのを見附けて持つて來る

作江「おい見ろよ、そこに丁度いゝ工合に青竹があるじやないか、こいつを割つて、この中に三人の爆彈を一緒につめよう」



江下「うん、そうだ、丁度いゝ工合だ、さあつめやう」

北川「あゝ、これで仕度は出来た、もう出發を待つばかりか」

こゝで三人一緒に青竹につめる

作江「おい、先發隊が出發した様だぞ」

江下「うまくやるといゝな」

この時機關銃の音しきり、やがて大爆音、しばらくして馬田軍曹馳け來り、息を切らして云ふ。

馬田「君達、先發隊はまだ鐵條網に行きつかない中に、爆彈が敵彈でやられちやつて、口惜しい事に、みんなやられてしまつたらしい、其の次の組が、今出發したんだが、今度こそはいよく君達の番だぞ、しつかりやつて呉れ、いゝか、仕度は出来てるか」

と云ひ捨て、舞臺より消える。

北川「先發隊は、仕損じやつたか、口惜しいだらうな」  
作江「次のが、うまく成功するかなあ」

盛んに機關銃、爆音。

江下「おい、今のもやられた様だぞ、こんどこそ俺達だ、

さあ、やらう」

「やらう」「やらう」と、北川、作江も破壊筒を持つて共に立上る、と忽ち雲現れて暗くなる。

江下「やあ、えらく暗くなつて來たじやないか、素晴らしいなあ」

北川「これは素敵だ、俺達が成功する様にと、日本の神様が助けて下さるのだ、これじや、いくら敵だつて、僕達の進むのを見附ける事は出来まい」

作江「有り難い事だ、さあ急いでやらう、雲の晴れない中に、鐵條網のぐつと近くまで行かう」

と三人、足探りしながら進む。

江下「おい、この邊が鐵條網の直ぐ手前の塹壕だぞ、みんな氣を附けろよ、深いぞ、どうだ、いゝ鹽梅に誰も敵彈に當らないじやないか、全く神様のお助けだ、ぐつぐつしちや居られない、こゝらで爆彈に火をつけ様じやないか」

と破壊筒を降し、点火する、そして三人顔を上げ

北川「さあ、いゝか、あそこの所まで體ごと飛ぶんだぞ」

二人「よし、まあ三人一緒に」

——幕——

三人一緒に、遙か彼方より聞える様に小さな聲で、天皇陛下  
萬歳!! と叫ぶ。やがて、大爆音、機關銃、ピストルの音煩  
り、やがて吾軍の進撃を現すためのレコードを舞臺裏にてか  
ける。一例として「攻撃」と云ふレコードなど宜しからん。

### 第三場 爆破の跡

背景——第二場の背景を用ふ、鐵條網を舞臺の中央に來る  
様に貼る、そして鐵條網の一部分だけを破壊されたもの  
を描き、大きい背景に貼り合せる、こゝへ日章旗を立て  
る。

登場人形

下元旅團長

松 下 大 尉

其他從者三四人。

下元少將、騎馬にて靜々と現れる積りなりしも、馬  
がうまく出來ず、又人との釣合ひも六ヶしく、到底

間に合ひ兼ねて、馬なしにした。

こゝの少將は、他の軍人と區別するため鐵兜でな  
に、普通の帽子にした。

——幕開く——

下元旅團長一行、松下大尉先導にて靜々と、話しながら舞臺  
面へ現れる。鐵條網の爆破された所へ來ると、松下大尉、  
下元少將に向ひ、改めて擧手の禮を行ひ、上體少し前こども  
にして左の報告をなす。

松下大尉「閣下報告申し上げます。この鐵條網の爆破に當り  
まして、幾班も、幾班もの先發隊が出たのでありますけ  
れども、どれもく鐵條網に近づかない中に、やつつけ  
られてしまひましたり、敵彈が爆發して、口惜しい事に  
味方の兵が木葉微塵にされてしまつたのであります。何  
しろ、總攻撃の時間も迫つて居りますので、無念でもあ  
るし、いらくもするし、申上げる言葉もありませんで  
した。最後の班は、作江、江下、北川の三上等兵であり  
ましたが、自分の番が來ますと、勇み進んでたゞ一言、  
「行つて参ります」と軽く挨拶したゞけで出て行きますし

た。そいつが閣下、鐵條網の近くへ行きますと、火をつけた破壊筒を持つたまま、體ごと飛び込んでしまつたのであります。すると一大爆音、砂ぼこりが立ち上りました。その跡を見ますと、鐵條網が數ヶ所破壊されて居りました。そこを礎大隊が、雪崩れを打つて突撃せられたのであります—

下元旅團長「うむ、そうか、すると、今朝の廟行鎮に於け

## 金 太 郎

感應幼稚園 青 柳 節 子

登場人物

金 太 郎

熊

鹿

る我が軍の大勝利は、全くこの作江、江下、北川三勇士の勇ましい突進のお蔭である。實に立派な、死に方をして呉れたもんだ、さあ旅團長初め、戦友一同、謹んでこの勇敢なる三勇士に敬禮をしよう—

松下大尉「中隊氣を付け!! 敬禮—

レコード、(三勇士のレコードの最終にある葬式のラッパの部だけ)これが済むと、

—— 靜かに慕 —— (終り)

深山の風景、暫く鳥の鳴き聲をきかせてから熊は右手鹿は左手から同時に速ぎ足にて登場

熊 (中央で出合つてから)おや鹿さんぢやないか。

鹿 (びつくりして)おや、熊さん、今日は。

熊 すい分、久しぶりだね。

鹿 そうだね、すい分久しぶりだ。